震災を語り継ぐ

大震災　問題教団の内在的論理
――宗教的脅迫と社会との精神的断絶

藤田庄市（ふじた しょういち）

迷惑な「ドイツ系異端」の闖入

東日本大震災から約二か月後の二〇一一年五月二一日のことである。仙台市若林区のある避難所で八木山聖書福音キリスト教会が慰問コンサートを行っていた。すると讃美歌を聞きつけてクリスチャンと名乗る二人のドイツ人男性が会場に入ってきた。一見、ボランティア風の旅行者のような服装で英語を話し、感じも良かったとか。ちょうどコンサートが終わり、次の会場へ移動するところだったので彼らもついてきた。次の避難所でのコンサートのなかで、栗田義浩牧師が励ましの言葉をと思い、彼らにマイクを渡した。ところが、である。神の愛について語り始める間も無く「震災を神の怒り、裁きとして受け止め悔い改めなさい」、「（人々が）罪を犯したゆえ、神は怒り、愛のむちとして震災を起こしたのだ」などと、とても通訳などできないことを語り、制止しても五分一〇分としゃべり続けた。いいコンサートが台なしになってしまった。

翌二二日の日曜日。仙台福音自由教会の礼拝中に、ドカドカと入って来る者がいた。白のTシャツには赤文字で「神の怒り」と書かれている。例のドイツ人だった。講壇を占拠し、いきなり英語でまくし立て降りようとしない。最前列にいた門谷信愛希副牧師（当時。現、古川福音自由教会牧師）は、すでにインターネットで彼らについての情報を得ていた。門谷が「カム・ダウン！」、奥で話を聞くからと連れ出すと、彼らは額に青筋を立ててまくし立て、大声を出しながら興奮して出て行ったという。彼らは各地のキリスト教会に出没し、「震災は神の裁き」「神の愛ばかり伝えて、裁きをつたえないクリスチャンは裁かれる」などと言って回った。実家が津波の被害を受けた牧師に対しては、「あなたの罪のせいだ」と言い放った。彼らはホルスト・シャフラネックという人物をリーダーとするドイツのグループで、アメリカのハリケーン被害でも同様のことを行ったという。クリスチャン新聞は「ドイツ系異端　被災地を荒らす」との見出しを付け、報道した。(1)

時間を七年ほど遡る。二〇〇四年に東南アジアで五〇万人もの犠牲者を出したインド洋津波の数日後、オンラインの討論フォーラムでは津波の「真」の理由について次のような意見があった（ジェシー・ベリング『ヒトはなぜ神を信じるのか　信仰する本能』化学同人、二〇一二年、九九頁。筆者注、文脈から討論は欧米人によるものとみられる）。

「神が言う。私は警告としておまえたちに出来事を振りかけるのだ。おまえたちの振る舞いをよく考え、改めるがよい」

「多くの場合、神は、神のまえに人々を跪かせるために、こうした出来事を起こすのだ。この世界を御する、人間よりも大きなにかがいるということをわからせるために、これだけの規模のものになるのだ」

「今回の大災害は、それに見舞われた人々にとってはまったく道徳的な出来事、すなわち私たちに利するように神が行う行為なのだ」

著者のベリングは同じ章で心理学者の論文からこんな引用をしている――「たとえばだれかが私たちの顔面にパンチを浴びせたり、私たちのガールフレンドと寝たりした時には、それはだれかが自明だが、災いがもっと抽象的なもので（がん、津波、地震を想定してもらうとよい）、非難すべき明白な行為者がいない時には、私たちはそこに神の手を見る」（同書、一七一―一七二頁）。

統一教会　大震災も献金に「活用」

東日本大震災による宗教界の多様な反応のなかで、ほとんど知られていないのが社会的問題があるとされてきた宗教団体の動きである。冒頭に報告したエピソードは、外国からの迷惑このうえない闖入者と、彼らの基盤である欧米の神観の断面の噴出ぶりである。それらは天罰論、天譴論の原初的形態であるが、この形態が、問題視されてきた教団においてどのように展開されたか。統一教会（世界基督教統一神霊協会）、エホバの証人（ものみの塔聖書冊子協会）、顕正会（富士大石寺顕正会）について以下レポートする。

では、ベリングがピックアップしたような〝宗教思想〟における「神の手」を、教祖ないし教祖に準じるレベルの人物が説いた時、その教団ではどういうことになるのか。統一教会ではこんなことになった。(2)

大震災の数日後、統一教会の本拠である韓国のチョンピョンにおける修練会で、「テモニム（大母様）」が霊能者なる金孝南に降霊して次のように告げた。

「震災が起きる前に日本を巡回して大会をし、そこに一万人の新規参加を条件にして、本来なら今回の地震は関東を直撃して関東地方が真っ二つに分断されていたところを震源地を海にまで飛ばすことが出来た」

テモニムというのは教祖文鮮明（二〇一二年九月三日死去）の妻である韓鶴子の母親洪順愛のことで、「真の母を育てた偉大なる母」として文鮮明が命名した。その霊が集会や修練会で降りてきて霊言を語るとされ、信者には絶対的な存在である。テモニムはこうも語った。

「今回の震災で亡くなった人たちを特別解怨してチョンピョンの修練所で一〇〇日間の原理講義を学んだ後に絶対善霊として地上で働けるようにする」

大震災の犠牲者の霊を韓国の統一教会の修練所に集め、彼らの教義を学ばせるというのである。統一教会信者が行っている霊感商法では先祖は地獄で苦しんでおり、とりわけ事故死などの不慮の死を、彼らは堕地獄の恰好の宗教的脅迫の道具としている。それからすれば「絶対善霊」にするというのは〝破格の待遇〟である。しかし、

世俗の常識に照らせば、震源地の移動も、死者への原理講義のことも、テモニムの霊言は高慢そのものであり、犠牲者とその遺族、被災者に対して一片の心配りすら欠如しているのは明白である。

「とにかく伝道をしてお父様を証しすることが日本を救う」

これがテモニムの霊言の結論だった。これを宗教的次元の言説などとの解釈に陥ることは、彼らと同一の地平に立つも同然である。「お父様」とは「真の」お父様すなわち文鮮明イコール神のことであり、伝道とは霊感商法と不可分の勧誘である。

ではそうした韓国の教団中枢レベルの言動に日本の統一教会はどう反応しただろうか。

大震災後の三月一四日、全国の信者に一五日付のメールが送信されてきた。そこには文教祖夫妻、後継者及びテモニムのメッセージを信者に思い起こさせたうえで、三日分の断食と、一食の断食を七〇〇円見当として九回分、計六三〇〇円の支援金を教会に入れるようにとの指示があった。文鮮明が死去した折には日本人信者三万人に対し、一人一二万円の献金指示が出された。それをスライドさせて推定すれば、三万人に六三〇〇円を掛けて一億八九〇〇万円となる。もっとも、統一教会の公式サイトなどを見ても、支援金を贈ったという情報はなかった。

しかし、統一教会の所業を知る者であれば、この額は少ないと感じること請け合いである。

はたせるかな、そのメールと同日付で首都圏の信者あてに出された「食口の皆様へ」と題したA4一枚の文書がある。これによると、地震・津波は本来首都圏を襲うはずだったのだから「私達が逝く立場であったのであり、そうなれば既に私達は逝った者であります」とし、「こうして生かされた命であるなら、神様のために使うのみであります」と表明する。続いて「御言」とあるので文鮮明の言葉であろう、「私よりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない」「私よりも息子や娘を愛する者は、私にふさわしくない」との言葉が引かれる。統一教会が肉親への愛情も管理しているさまが垣間見える。そして、「今回の精誠」を「神様だけを愛する心情